

染香

ぜんこう

福泉寺寺報
令和3年8月
第98号
(毎月1日発行)
ホームページ



コロナ盆
ご先祖様だけ
帰省して

「わすれる」と「2週

今年もお盆のお勤めを無事終えました。こんな状況でもお参りをさせていただけ、今までの「当たり前」を有り難く感じました。改めて感謝申し上げます。

玄関や縁側からお勤めしていると、ご先祖様の写真がよく見えます。また、皆さんのお参りのお姿も見えます。このことから、皆さんが様々な思いの中でお参りなさっていることが今まで以上に感じられ、少なくとも私にとっては大変有意義なひと時でした。



もうひとつ、今年は忘れられない出来事がありました。

あるお参り先でのこと、長年病氣のご主人を支えた奥さんに、認知症の症状が現れてきた、と娘さんが言いました。私には、いつもの奥さんのように見え、デイサービスの合間を縫っての、久しぶりの再会を喜びました。

翌日の昼、奥さんから電話がありました。

「お参りを待っているんですけど…」

こういう場合、どういふ風に答えたいのでしょうか。忙しい私は「昨日参りましたよ。娘さんにもお会い出来ました。」と返し、「ちゃんとお勤めしましたので、安心してくださいね」と加えました。

「もう私、分からなくなってきました」と涙声が続きます。

実は、このやり取りを、今日までにあと4回繰り返しています。

私は感激しました。お参りしたことを忘れても、お参りしなければ、という思いは残っている。ある意味、奥さんのこれまでの家族やご先祖への思いが病氣によって明らかになったかも知れません。

私は、正信偈の「大悲無咎常照我」を思いました。私が仏さまを忘れても、仏さまは決して私を忘れない、そんな意味です。ままならない私、あてにならない私に、「あなたを忘れないよ」という力が働いている。それを「アミダ」というのですね。いかがでしょうか。

(住職)

お経のことば折々



《光(ひかり)》

私たちの目に見えない仏さまを、お釈迦さまは「光」と表現されました。実は光も、それ自体を目で確認することができません。「花咲かす 見えぬ力を 春という」という歌があります。花が咲く、風が吹く、これによって「春」を感じることができると。

仏さまも同じです。「姿」ではなく「働き」なのです。

手を合わせる、念仏を称えることも、仏さまの光が差した、といえるでしょう…。

ちょっと あたまの こりほぐし

なぞなぞです。

たくさんこぼしても、減らないものは何？

答えは裏面です

むしろ、こぼせばこぼすほど、どんどん増えるかも…



おてらから

ホームページを日々活用ください

「お寺の掲示板」

「月一回の新聞」

「住職の日誌」

「法話映像」

「葬式について考えるコラム」

「行事案内」

など随時更新しております。ありがたく

も皆様からのお便りも頂戴しております。

お寺のLINEを開設しました

迷惑電話が増えてきたせいか、固定電話での連絡が難しくなってきました。

本来は直接やり取りすべきなのでしょうが、これも方法のひとつと想っています。可能な方はご登録をお願いいたします。

(下のQRコードをカメラで

かざしてみてください)



たれが風を見たでしよう

桜井 俊彦

たれが風を 見たでしよう

ぼくもあなたも 見やしない

けれども木の葉を ふるわせて

風は通り抜けていく

たれが風を 見たでしよう

あなたもぼくも 見やしない

けれど こだちが 頭をさげて

風は通りすぎてゆく

この童謡は、大正時代に流行した「風」という歌です。

京都で生まれた母は、この歌を六角堂の前にあった日曜学校で習ったもので、大変気に入っていました。素晴らしい宗教的味わいのある歌で、私も気に入っています。

イギリスの女性の詩人、クリスティーナ・ロゼットティの詩『Who Has Seen The Wind?』(誰が風を見たでしよう)を、

西條八十が訳して詩を付けたものです。「たれは「だれ」の文学的表現で

す。「こだち」というのは、木がたくさん立っている様子をいいます。

仏さまや神さまといっても、子ども

たちにはなかなかうまく説明できない

ものです。仏さまというと、仏像を想像して形あるものとして多くの人はと

らえてしまいます。

この詩のように「風」として説明する

と、形に見えるものではなく「はたらき」であることがわかります。仏さまの

ことを頭で理解できなくても、「気づくこと」「目とめること」として感じる

世界があるように思います。



『やわらか子ども法話』法蔵館

みなさんのリレー閉話

青色 青光
しょう しき しょう こう

私とボランティア 武田 隆行

今から4年前、宜山に於いても不審者が

多発したように思います。その状況を踏まえ、

上山守の町内会で見守りボランティアの募集が

ありました。

私は時間的にも余裕があったため、早速応募

しました。

小学生の登下校時に合わせて、交通事故防

止も目的に山守橋南詰交差点に立つことにな

りました。見守り活動をしていくと、いつしか

子どもたちと話すようになり、話をするこ

どもたちから元気パワーをもらい、だんだんと

見守りを行うことに楽しみが湧いてきたように

思います。

4月入学から1か月経つ頃には、帰るのが

早い子と遅い子では、10分から、時には20分

以上の差があります。

「○○ちゃんはもう帰ったかな？」と気に留めな

がら見守りをしていました。あまりに遅い時には

車や途中まで迎えに行ったりもしていました。

子どもたちが帰る時、元気な声で「ただいま」と

言ってくれる時、「家までもう少し。気をつけてお

かえり」と声をかける時が、私が元気をもらえる

時です。

住職から皆さまへ

この厳しい状況の中、お盆参りをさせていただきまして、心から感謝申し上げます。

玄関や縁側からの「リモート」のようなお勤めも、させていただいていりうちに慣れてくるものです。

声だけをお届けしている中で、大きな気づきがありました。仏間の上にかけてあるお写真や皆さまの合掌姿など、普段拝見することのない世界を垣間見て、短い時間のお参りに中にも先立たれたご家族、ご先祖さまに対する皆さまの思いを、例年以上に感じた今年のお盆参りでした。僧侶として気持ちを新たにしました。

コロナの感染状況が、日増しに深刻になっていきます。皆さま、どうか御身

お大切にお過ごしくださいませ。またお会いする日まで……。

